

# 木山捷平さんのこと

小山 祐 士

私は東京で三度焼け出されその度に家族の疎開先きに帰って行ったが、私は東京を離れてしまうわけには行かなかった。NHKの芸能囑託や海軍関係の軍楽隊の主事をしてきたからである。仕事の整理をして郷里に引き揚げるために最後に東京を離れたのは終戦の年の七月三十一日の夜であった。ギューギュー詰めめの貨物列車に押しこめられ、途中、何回も列車が空襲にあい、射撃され、郷里の福山に着いたのは八月三日であった。六日には広島に原爆が投下され、八日には福山市も、天主閣が火柱を立てながらふっ飛び、町の八割が焼失してしまった。

私の両親や弟の家族たちは、福山市の奥の福塩線の湯田村に疎開していたが、私は妻の実家の世話で借りた岡山県玉島市の借家で、家族たちと八月十五日を迎えた。玉島と

いう町は山陽線の玉島駅から三キロほど離れた風光明媚な瀬戸内海に面した由緒のある古い港町で、町はずれの私の借りた家の横には小川が流れ、まわりは田園になっていた。近くに葦の生えた大きな入江があり、私が書齋にしていた二階の八畳間からは、川の堤の向こうに、良寛にゆかりの深い名刹、円道寺の丘が見えた。その円道寺の丘からは夜になると梟の啼く声が聞こえて来た。こんなにひっそりとした鄙びた環境は私には生れて始めてであった。

八月十五日を境に戦時体制から一変して、世の中が文化文化の時代に衣裳換えをしたせいか、猫も杓子も文化文化で、私の家にも、岡山の県庁や新聞社や放送局の人たちがやって来て、私はおだてられ、かつぎ出されて、柄にもなく文化棒の片棒をかがされる羽目になった。

その年の秋、母校の中学校の先生が「学校主催の文化講座に講師として出席して演劇の話をしてもらいたい」といって交渉にやって来た時には「おまえも猫も杓子もか！」と私は苦笑をした。というのは、私の母校の広島県立福山誠之館中学校は、私の在校当時は文化などといった感じからはおよそ縁の遠い、質実剛健、堅いっぽうの、小説を読むことさえ厳禁されていた学校だったからである。

文化講座の企画書の予定講師の顔ぶれを見て、私は、井伏さんが郷里の広島県深安郡加茂町に、村上菊一郎氏が三原市に、私の従兄弟で中外（日経）の学芸部長をしていた



小山東一が福山市に疎開して帰って来ていることを、その時はじめて知ったのである。岡山県の笠岡市には文芸春秋の当選作家である古川洋三氏が、広島県の新市には「新三田文学」の高田英之助氏が疎開して帰郷していた。

捷平さんが満州から郷里の、現在は笠岡市に編入されている小田郡新山村に引揚げて来たのはその翌年ではなかったかと思う。そのうちに、倉敷に居をかまえて、戦後いち早く（二十年の末に）「文学祭」を発行していた藤原審爾氏も加わって、私たちは月に一回ぐらい「今月は桃の花を眺める会」「今月は夜釣りを楽しむ会」「この次の十五日は月見の会」と勝手放題な名前をつけては集った。集ると飲んで雑魚寝をし、醒めてはまた飲み、井伏さん、捷平さん、菊一つつあん、洋さん、英之助さん、祐さん……と、方言なまりで呼び合いながら、とりとめのない文学放談などをした。何分、寂しがりやの酒好きな連中ばかりだったので、翌朝になると、「ひとつ迎い酒を……」といっただけまた湯呑みに酒や焼酎を注ぎ合い、夕方になると笠岡から倉敷の藤原の所に酒席を移動し、その翌日は岡山に出かけるといった塩梅で、二日も三日も連らなっては、みんな集団のなかで騒々しく憂さを晴していた。

酒の入手は至難な時代であったが、藤原審爾が、給社で造り酒屋をやっていた友人から手に入れてくれた。藤原は、一升瓶を詰めた重いリュックを背負った若い作家を連

るそうで」

と、言った。

捷平さんが毛筆で原稿を書いていることは私も知っていた。新山の捷平さんの家に行った時、私が

「仕事はどうだ」

とたずねたら、

「う。硯に向って曇ばかり磨るために机の前に坐つとるよなもんだ。硯を磨っては、お茶を淹れて、ひと休みするだろ、一日に半枚も書けない時があるんだ」

と言ったことがあった。その時は、捷平さんは紋付を着てはいなかったが、私には、紋付を着て、あくらを組んで毛筆で原稿を書いている捷平さんの姿は、想像が出来た。

しかし、私は、親父さんに、

「まさか」と言った。

「それでも、新山から時々見えるお客が、そう言うとりんさったもんで、わしア、この間、木山さんに、たずねてみたんです。そしたら、木山さん「あ。紋付ア、質屋に持って行っても安いでなア」そがいに言うとりんさったですぞな……とぼけんさったんでせうかの。木山さんいうご仁は、オナゴの人と話しんさつとつても、何処までがほんとうか、わけがわからんほど、とぼけた物言いをなさりやんすけえのう。ほんにミヤスイええご仁で……もつとも、ちいと氣むずかしいようなご仁でもありそうじゃが……」

れて、袴をはいて現われたりした。

捷平さんの新山村から笠岡までは井笠鉄道で十五分ぐらい、私の玉島の駅から笠岡までは一時間ぐらいの距離だったので、会のない日でも捷平さんや私はしょっちゅう古川の家に行っていたが、村上菊一郎も三原からよく笠岡にや

つて来た。笠岡では、古川の家の裏手の海辺に近い通りの横町の小さな居酒屋に出かけるか、その店から酒を買って来て古川家で飲むのがならわしであった。酒といっても、たいていカストリといった焼酎である。

捷平さんは笠岡に来て、古川の家の前は素通りして、その居酒屋に行って、こっそりと独りで飲んでいることもあった。誰だつて独りで飲みたい時がある。しかし、そんな時捷平さんに出あうと、捷平さんはキョトンとした顔をして「あ、わしア、い、いま来たところなんだ、これから塩湯に行こうと思つてね」どんなに酒がはいっている時でも、捷平さんは決つたようにとぼけた声をして「あ、い、いま来たところなんだ」と言った。居酒屋の親父さんによると、捷平さんは、屋間から一人で時々、現われていたらしい。或る日、その親父さんが私に

「木山さんは、新山におられる時にやア、ふだんでも、いつも紋付を着とられるそうですのう。紋付を着んさつて終日、机の前に坐つて、硯を磨っては筆で原稿を書いとられ

「一人で来ると、そんなに氣むずかしい……?」

「いいえいえ……氣むずかしいどころか。ほんにミヤスイ、ええご仁ですがな。ただ、ああいうご仁は、家では、ちいと氣むずかしんじやアなからうか、チラとフツと、そう思ったことがありやんすもんで……」

と言つて、親父さんは大笑いをして見せた。

ふだん着の紋付はとにかく、捷平さんは、あれでなかなかお洒落だったようで、着物のオーバーを着て大黒巾のよななベレー帽をかむっていたことがあった。

その親父さんが、或る日、「これを装幀したいのですがの」といって、巻紙をひろげて見せた。仙花の半紙二枚を横に糊付けしたもので、それには達筆な墨筆で、次のような詩が書いてあった。

妻

団子や芋を食ふので

妻はよく尻をひるなり

少しは遠慮もするならん

それでも出るならん

しかしばくはつくづく



新聞社から家庭欄用の詩を求められて書いたというこの詩は、後日、岡山から発行されていた、吉田研一、永瀬清子、山本遺太郎、吉塚勤治たちの「詩作」に発表したが、親父さんが果たして装幀したかどうか、私は聞きもらってしまった。

私たちは顔をあわすと、いっぱいやりながら貧乏話やとりとめのない文学放談ばかりしていた。捷平さんは満州の話になると雄弁になった。そのうちに藤原が音頭取りになって私たちは文芸雑誌を出す計画をたて、藤原の後援者のいた岡山に集っては何回となく企画会議をして作品出版社を作り藤原の編集で「作品」という雑誌を発行した。その「作品」の創刊号に、捷平さんは「大陸もの第一号」の傑作を発表した。創刊号には井伏さんも小説を発表され、評論に青野季吉、山岸外史、随筆に尾崎一雄、永井龍男、詩に丸山薫、永瀬清子などの顔ぶれが並んでいた。捷平さんは、その原稿を毛筆で書いていた。

その「作品」の発行をきっかけのようにして、次ぎ次ぎに、みんな東京に引き揚げて行った。一人が引揚げるたびに私たちは送別会をしたが、最後には私一人が残ったので

葉をにごしてしまった。

疎開中、捷平さんは酔っぱらっても、家庭のことなどは絶体にしゃべらなかった。たまにしゃべると「牡丹の花よりも埃をかぶったねぶかの花が好きだ」式の話しかたで、奥さんをさんざんこきおろしていたが、古川の奥さんの話によると、それらは、みんな捷平さんの作り話だったようである。

## 夏の果て

——木山捷平追悼——

村上菊一郎

標高千メートルの八ヶ岳高原のK村は、ひと月おくれの盆が過ぎると、もうすっかり秋の気配が濃くなって、われもこう、おみなえし、ききょうなどの秋草が咲き出し、穂波の揃ったすすきの上には真赤なあきあかねが飛びはじめ、甲斐駒、北岳などの高い山々の稜線がくっきりと見え

誰も送別会のしてくれてがなく、私は、高田英之助や木下夕爾と——彼は薬局を経営していた薬剤師でもあったので——木下が健胃クミンキとアルコールとをベースにて作ってくれた木下ウキスキーで、お別れの乾杯をし、「詩作」の連中と岡山の「和尚」という屋台で酔っぱらって玉島を引き揚げた。

西荻窪の八百屋の二階に奥さんと子供さんと間借りをしていた捷平さんを、村上菊一郎と最初に訪ねた時、捷平さんは

「おい、これから田村泰次郎の豪邸のそとをひと廻りして見よう。わしア、満州の神経痛がまた出て来て、足が悪んでまだ廻ったことはないが、半里以上もあるそうだ。ほんどだよ、祐さん……太宰が夢を見た話を知つとるじゃろ。太宰が飛行機に乗って田村邸の上空を飛んだ夢だが、幾ら飛んでも田村邸の庭が続いていたそうだ」

真面目くさった顔をしてそう言った。

そして、

「子供が、中学校に行つとるんだが、英語の辞書をどうしても買うてくれ、というてきかないんだが、辞書を買ってやらにやア、いけんもんだろうかの」

と、木山流のユニークなとぼけた声で言ったりしたが

「新山の家はどうなっているんだい」などと聞いても「ああ……あの家かア……」と言ったりするだけで、すぐに言

るようになってきた。野辺山あたりから関西方面へ出荷するキャベツを満載した貨物列車が、一日に二回、山荘の少し下の線路を通過してゆくたびに、蒸気機関車の黒いけむりは、から松林の上にしばらく揺曳する。

夏のはじめに鳴きしまっていたかっこうやほととぎすはどこかへ姿を消し、いまは時たまうぐいすか山鳩の声が聞こえるだけだが、ひぐらしはちょっと日がかげるとすぐ気ぜわしく鳴き立てる。わたしは孤独なひとり暮らしに慣れて、自炊もどうやら苦にならなくなってきた。戸数七十足らずのこの小さな村には雑貨屋が四軒あって、わたしは気の向くままにそのうちのいずれかの店まで石ころ道を歩いて食料品を買いに出かける。豆腐は堅くて大きく、湯豆腐を作っても一度には食べきれない。豚肉は百グラム八十円の並肉しかないが、野菜とごった煮にしても結構やわらかい。村の酒屋には地酒の二級酒が置いてあるだけなので、わたしは五日に一度ぐらいの割でバスに乗り、台地を三十分ほど下ったN町まで角びんのウイスキーを買いに行き、ついでにレモンやチーズやしょうがなども仕入れてくる。この程度の不便は、静寂な環境とさわやかな空気との代償と思つて我慢しなければならぬ。

農家では葉煙草の乾燥とホップの取り入れがはじまり、山荘の前の村道には、耕運機からこぼれ落ちたホップの青いつぼみが点々と続いている。晴れた夜には、さそり座の



主屋アンタレスが鳳凰<sup>ほうおう</sup>三山のかげに傾いてゆくのを眺めながら、わたしは逝く夏を惜しんでいた。そんな平穩無事な日々が流れてゆくうち、八月二十四日の朝、木山捷平が亡くなったという記事が新聞に出ているのを見てアッと驚いた。六月上旬、東京女子大附属病院の榎原外科に入院している彼を見舞ったときは、わたしの持参したグラジオラス、白ゆり、ダリア、スターチスなどの夏花を大そう喜んでくれて、いろいろと世間話をし、案外元氣そうな様子だった。彼は病床でも新聞雑誌には丹念に目を通して見るとみえて、文壇や世間の出来事には詳しくかった。食道ガンということを知っていたわたしは、病状についての質問は遠慮したが、彼は傍らの夫人と顔を見合せて、一、二年氣永に養生するつもりだとのんきそうに笑っていた。それがこんなに早く、三ヶ月足らずのうちに死去してしまうとは、ガンの恐ろしさをまざまざと思ひ知らされた感じがして、その朝の秋風はひとしおさびしくわたしの胸の中を吹き抜けて行った。木山捷平の一日あとに死んだ丸岡明（以下すべて敬称省略）も肺ガンだったという。わたしたちの阿佐ヶ谷会のメンバーのうち、ガンで亡くなったのは、外村繁、亀井勝一郎に次いで木山捷平が三人目である。

わたしは急いで帰京し、二十六日の告別式に参列した。練馬区立野町の木山邸は拙宅から歩いて十分ぐらいの近距離である。先年木山邸の二階の書齋を増築したのは、わた

おごってくれるようになり、着ているものも目に見えて立派になった。彼は一見どこのおっさんかと思われるような鈍重な風手をしながら、根は義理がたい純情な性質なのだ。彼の小説は飄々たるユーモラスな描写の裏に、巧利的な世相に対する鋭い皮肉と被害者の悲哀感を秘めていて、それが大きな魅力になっている。

告別式の終ったあとは、別室で未亡人から酒肴をふるまわれた。藤原審爾、尾崎一雄、井伏鱒二、田辺茂一、三浦哲郎、浅見淵、小山祐士、檀一雄、小田嶽夫の諸氏が坐っている前で、遺児の万里君が謝辞を述べた。万里君は慶応理財科出身、東京ガスの中堅社員であり、すでに妻子もあるので、故人に後顧の憂いはない。わたしは魚に乏しい高原から帰ってきたばかりだったので、鯛やまぐろの刺身を意地汚くばくついた。親しい先輩友人の葬式の直後には酒を飲んで悲しみを紛らすのが一番である。わたしは小田嶽夫と小山祐士に誘われるまま、石神井公園ボート池の上の檀邸に押しかけて二次会に加わった。檀一雄は千福の超特級のほかにジョニーウォーカーの黒も持ち出してきて。こうして晩夏の霖雨の午後、真鍋呉夫も顔を出して、賑かな酒宴が続いた。その席上、木山捷平と新庄嘉章の確執のことが話題に上ったが、わたしの考えでは、後者は酔うと妙なフェミニストぶりを発揮する癖があるので、女にもてない木山捷平は常日頃それを苦々しく思っていたのだろう。

しが紹介した知合いの大工であり、庭に咲き乱れているしゅうかいどうは、いつかわたしのところから移し植えたのが殖えたのだ。告別式の当日はあいにく台風十号の影響で前日からの小雨が降りやまず、陰鬱な空模様だったが、二百人を越える弔客が焼香し、現役の作家の死を悼むのにおさわしい盛大な葬儀だった。霊前では阿佐ヶ谷会を代表して小田嶽夫が切々たる弔辞を朗読した。

いうまでもないことだが、木山捷平は決して大作家ではない。若いころ「メクラとチンバ」という詩集を出して、アナーキスト系の詩人たちの群にまじっていたが、のちに「海豹」や「日本浪曼派」に同人として参加し、とぼけた味の私小説を書きはじめた。しかし、あまり健筆ではなく、戦前はもちろん、戦後満州から引揚げてきたのちも、西荻窪一丁目一番地の間借の二階や天沼の安アパートの一室で長いあいだ不遇のまま、貧乏生活をかこっていた。怠惰癖が多少たたっていたふしもある。ところが昭和三十七年に長篇小説「大陸の細道」で芸術選奨を受賞して以来、ようやく一般にその名を知られ、ジャーナリズムに特異な地位を占めるようになった。板についた庶民性、生れながらの詩情と好色、そういった捷平独特の風格がいきよに文章の中ににじみ出てきた。わたしは三十年來この年上の友人から飲み屋でワリ割を払ってもらった覚えは一度もなかったが、最近はいつも大きな札入れから金を出して気前よく

また、大学中退というコンプレックスや相手が譏諷家のくせに収入が多いというひがみも因をなしていたのだろう。新庄教授の暴力？で挫かれたという指は、実はずっと以前にガラスの破片で負傷したのをこじらせたものであることは、小説集「耳学問」（昭和三十二年刊）あとがきに書いてある通りである。その古い傷をまたやられたので、それだけでなく遅筆の彼が執筆に難渋したのは事実である。それにしてもあんなにしつこく罵言を公けにしないでよかったらうにと第三者には思えるのだが、一面、こういう執念深い性質があればこそ、彼は小説家として一生を全うすることができたのかも知れない。

檀邸からの帰途、タクシーの中で小山祐士は時計を見ながら、「キクイツァン、もう朝の五時半ですきあやのう？」と広島弁丸出しで言った。この有名な劇作家は夜通し痛飲したものと一瞬錯覚したらしい。わたしは車内のラジオで当分雨が降り続く見込みだという天気予報を聞き、山荘へはいつまた出向くことができるだろうかと考えていた。



# 木山捷平と私

野長瀬 正夫

昭和二十四年の秋頃のことである。当時私の家には五歳と三歳になる女の子がいた。毎日部屋じゅう人形や玩具やぼろきれをひきちらかして、ままごと遊びに夢中の年頃であったが、ある日、その二人の子供が、

「ねえ、木山さんごっこをしようよ」

「うん、しよう」

と隣りの部屋で話し合っているのが、ふと私の耳にはいった。それきり声は途絶えたが、二人は何かもそもそやっている気配である。「木山さんごっこ」とは何だろう。私は軽い好奇心にかられて、そっと覗いてみた。すると二人の子供は、てんでに帽子の代わりに頭に何かのせ、首にぼろきれを巻きつけ、肩には女房の割ぼう着や上っぱりなどをひっかけて、それがずり落ちないようにやや猫背の恰好

で、そろりそろりと部屋の中を歩き回っているのがあった。私は首をかしげながら小声で女房を呼び、「あれは一体なんだ」ときいてみた。すると女房は笑いをこらえながら説明した。

「木山さんがうちにいた頃、よく二重回しを着て外に出かけたでしょう。あの時のまねをしているんですよ」

ああそうかと、私は初めて子供達の「木山さんごっこ」なる遊びがわかった。二重回しという和服用コートは、戦後の子供達には一種異様な興味があるものらしい。昭和三十八年に亡くなった童話作家大木雄二氏が、その数年前のある日、二重回しをひっかけて外出したところ、近所の子供達がわあわあ囃したてながらぞろぞろついてくるのが困った、と話していたことがある。ちょうどテレビの子供番組に「月光仮面」だか「怪人二十面相」だか、二重回しを羽織って登場する怪人物が人气的になっていた頃なので、温厚な童話作家先生も、子供達から怪人に見立てられたのであろう。私は三十二、三年頃、外村繁氏が二重回しを着て国電に乗っていたのが最後に見た二重回し姿かと思っていたところ、今春になって上野駅のホームで、珍しく二重回しを着た明治人を見かけた。やはり子供達が立ち止まり振り返りして眺めていたのを覚えている。

木山捷平が戦後満州から郷里岡山へ引き上げ、それから再び上京して私の家に同居したのは一か月余りにすぎない

が、彼はそんな小さな子供達に、何か忘れたい印象と、ある温かいものを感じさせていったようである。やがて子供達は小学校へ上がる年になり、以後大学まで二十年にも近い年月、ほとんど彼と会うことはなかったのであるが、ときどき彼のことを話題にしては懐しんでいた。彼の文名が上がって、新聞・雑誌などでしばしば名前を見かけるようになったせいもあるが、そのずっと以前から「木山さんごっこ」の遊びが残るほど「忘れえぬ人」になっていたのである。それは私にとっては意外なようでもあり、また当然のことのようにも思われる。なぜなら木山という人は、特に強烈鮮明なアクの強さといったものは感じさせなかったが、一見さりげない、とぼけた風な言動のなかには、いつも何か不可解性の余情があって、それがときどき思い出さずにはいられない人間的な魅力(ある温かさ)になっていたと思う。ここでいう不可解性の余情とは、彼が若い頃から、容易に胸をひらいて自分を語ろうとしなかった一種の要心深さとも、つながりがあったように思われる。

彼と私とのつきあいは昭和四年から始まる。おそらく彼にとっても私にとっても、東京での友人としては最も古い仲間の一人といえよう。しかし彼はその頃から、両親が健在なのか、兄弟があるのかないのか、そんなことすら自分からはほとんど口に出さなかった。あるとき話のはずみで、弟が高等農林学校に入学したようなことを、ふと洩らした。

「え、高等農林へ？」私が問い返すと、彼はしまったという顔をして口をつぐんだ。元来私は人に強いことも強いられることも嫌いな性分なので、それ以上は敢て尋ねもしなかったが、彼が大久保駅近くの下宿にいた頃、ある日訪ねていくと郷里から小包でも届いた直後だったのか、部屋のすみに「木山果樹園」と印刷した包装紙があった。私が「おや」といった顔をして目をやる途端、さっと彼の手のびた。彼は急いでその包装紙をくちやくちやくに丸め、あつと思うまた紙屑籠へねじこんでしまった。

私はあつげにとられたが、この時も問うのをやめた。岡山は桃の産地ときくから、彼の生家も果樹園を経営しているのかと思ったが、彼は当時の親友だったはずの私に、生家の家業すら知られなくなかったようである。

こうした彼の秘密主義——要心深さは何から困ってくるものなのか私には不思議でならなかったが、この謎は、貧農的立場から歌いあげた彼の詩集「メクラとチンバ」や「野」が、逆説的にこれを解明する一つの鍵となるかもしれない。つまり彼は、自分の詩人的立場を擁護し正当化するために、比較的富裕な家庭に育ったことをひた隠しにしておいて、自分があたかも貧農の伴であるかのように見せておきたものではあるまいか——と私は勝手な推理を下したりしたものである。なぜなら昭和初期の青年達の間には、無産者ぶったポーズをとることが一種の社会的



流行でもあったからだ。現代は当時とは全く正反対で、大方の日本人達は有産者ぶったまねをすることに浮き身をやつしているようにも思われるが――。

木山も私も教員の出身である。私は教職をすてて大和の田舎から上京した。昭和四年四月のことである。木山も私と前後して岡山県から上京したようであるが、彼の場合は東京へ出向の形をとつたらしく、江戸川区の小松川小学校に勤めていた。私たちを結びつけたのは詩で、杉並区松の木、の麦畑の中にあつた田園アパートへ私を訪ねて来てくれたのも彼のほうからであつた。上野燭郎という帝展の画家夫妻が経営していたそのアパートには、当時商科大学の学生だつた伊藤整氏が自炊ぐらしをしていて、私に北海道の鯨をくれたりしたことなどを思い出す。「女人芸術」へ「放浪記」を書き始めたばかりの林芙美子さんが、ある日、庭でとれたという大根をお土産にぶらさげて、夫君といっしょに私を訪ねてくれたのもその頃であつた。

小松川小学校時代の木山については、面白い話がある。十年ほど前のことであるが、私はぐうぜん機から、家政や料理のことに明るい女性評論家のYさんから、彼女が小松川小学校の五年生か六年生のとき、受持の先生が木山捷平だつたときいて驚いた。彼女は笑いながら私に言った。「木山さんたら、あの頃、みんなからすぐく嫌われていたわよ」

ある日、彼は浮かぬ顔をして私を訪ねてきた。私はその頃、松の木のアパートから東中野駅近くの下宿に移っていた。昭和七、八年頃であつたらうか、はっきりした年月は覚えていないが、彼は小笠原の父島だか母島へ転任の内示を受けたというのであつた。いわゆる左遷というやつである。そこで、

「どうしたものでらうか」

と不安げなようすで、私の所へ相談にやってきたのであつた。今はそうでもないだろうが、当時小笠原へは月に一回の船便があるきりだつた。彼が心細がるのも無理からぬことだつた。だが私は、自分にふりかかつた災難ではないものだから、小説を書くという人間なら、生活体験を豊富にする必要があるなどと言って、行くことをすすめた。「なにも俊寛みたいに置き去りにされるわけじゃないから、一年か二年、行ってみたらいいじゃないか」すると彼はうらめしげな顔をして、とんでもないことを言い出した。

「それじゃ、君が月に一度は必ず遊びに来てくれるか」これは難題である。私が返事を渋つたので、彼もその時は決心のつかないまま帰つていった。木山が私に向かつて、こんな弱音とも甘えとも受けとれる言葉をはいしたのは初めてのことだつた。

結局、彼は小笠原には赴任しないで、学校をやめること

「みんなから」というのは、受持児童の中の一部の女の子のことであり、「嫌われていた」のは、おそらく彼の村夫子然として服装や、地方的な言動のせいであつたらうと、私は受けとつた。当時の木山は、文字どおり弊衣破帽で、持病の神経痛のため杖をつき、足をひきずりかげんにして歩いていた。床屋にも長く行かないし、服やネクタイを取り替えることもめつたになつたようである。私は木山と会うたびに、「おれは貧乏なくせに、なんておしゃれなんだろう」と自らを愧じたりしたものであつた。近頃の先生方の中には、しゃれた服装をして自家用車で通勤することを理想の教師像と考えている向きも多いようだが、わが木山捷平先生の通勤姿たるや、まるで大正期のお上りさんそっくりであつた。このスマートとはいえない先生が、思春期一歩前のおませな都会の少女達に人気が悪かつたのはむりもない、と私は思ったことである。

彼はこの頃から同人雑誌に小説を書き始めたので、文学仲間という厄介な友人もふえた。酒のつきあいも倍加したし、夜を徹して原稿を書くこともあつたらう。従つて他の教師達よりも欠勤が多かつたのではあるまいか。学校は遠いが、彼の生涯の生活路線となつた中央沿線から離れるのはいやだときているので、遅刻の回数もふえていったに相違ない。そんなこんなで校長の勤務評定が悪くなるのは、きわめて当然の成り行きといわねばならない。

なつた。やめるに至つたのは、突如として彼の身にふりかかつた、ある災難ともいふべき不幸な事件も原因になつたのではあるまいかと思うが、それを書くのは面倒だからここでは省略する。もし彼があつたとき小笠原へ行つたら、木山の初期作品に何篇かの小笠原物が加わるることになつたであらうにと、ちょっと惜しい気もする。

この頃、井伏文学のファンであつた私は、ある小さな雑誌に、東京駅から旅立つ友人に「おい、これを読め」と言つて、駅の売店で買った「夜ふけと梅の花」を汽車の窓から差し入れてやつた――という意味の書き出しから始まる井伏文学を讚美する小文を発表したことがある。私の部屋でこれを読んだ木山は、やや軽侮の色を浮かべながら、「ふん、ナンセンス文学か」と言つたものである。私は反論する代わりに「なんだ、木山にはまだ文学がわかつてないんだな」と、逆に彼を軽侮することによって昂る心をなだめたものである。ところが戦後、彼が井伏氏に師事しているという噂を伝え聞くに及んで、私は内心この二つ年上の友人に対して「ざまあみろ」という気がしないでもなかつた。

その井伏さんのことであるが、昭和三十六年五月、故小川未明氏の告別式の日、葬儀の雑用掛として小川家の門前に立っていた私は、実に三十年ぶりに井伏さんの姿をすぐ目の前に見かけた。しかし小心な私は居並ぶ人々の前に進



み出て、井伏さんに御無沙汰お詫びの挨拶をすることが、どうしても出来なかった。私は今でもその事が後味わるく頭にかおさってきて、あの日の自分を腹立たしく思っている。

さて、木山捷平の初めての創作集「河骨」が出版されたのは、日華事変が始まって何年かたった頃だったと記憶する。レインボー・グリルで出版記念会が催されたが、どんな人々が出席していたのかは、まるで覚えがない。ただ一人、太宰治とおぼしき人物が司会をしていて、私はテーブルスピーチを指名された。当時私は少女雑誌の編集者となって渡世していた。私のために安い稿料で原稿を書かされた文壇人が幾人かいるはずである。木山もたしか一度か二度のおつきあいをしてくれたと思う。私は木山の「河骨」について、「この小説集には木山の持ち味が全然でない。木山は文壇ジャーナリズムに禍されて、自分の本来の道を見失っているようだ」という意味のことをしゃべった。すると太宰治とおぼしき人物が、「それはほんとうだ」とも、あるいは「生意気なことを言う奴だ」——そのどちらとも受け取れるような目をして、じろっと私を見たことを思い出す。私が太宰治の顔を見たのは、あとにも先にもこの時だけだった。

木山が満州へ渡ったのは昭和十七年だったか八年だったか、それも私ははっきり記憶していない。あまり突然の話か、雄、神山潤氏らの四人だけである。他の数氏は印税の幾分かを先取りしたまま、ついに一枚も原稿は書いてくれなかった。そのうちに社が三回目の空襲をうけて解散のやむなきに至ったので、私は給料の一月分を退職金にもらって、郷里の奈良県十津川村へ引き上げることになった。もしも社の事業が継続されていたら、私は社主と原稿を書いてくれない作家達との間にはさまって、さぞや困惑したことであらうと思う。

木山に「和氣清麻呂」という二五〇枚の作品があることを今では知る人も少ないであろうが、これはある意味では珍重すべき作といえよう。もう一人——別のシリーズで伊藤整氏が「三人の少女」と題する少女小説を一冊書いてくれたのも、この頃のことであった。かの有名な伊藤整氏の少女小説というのも、一つの意外作というべきかもしれない。

私が帰郷したのは昭和二十年四月である。すでに日本の敗色は濃くなっていたが、本土決戦を呼号していたので、やがて鉄道も寸断され、大和吉野の山村までたどりつくのは困難になるだろうと私は予想していた。郷里には母と妹がいる。私はこの二人のことが気がかりだったのである。

荷物の輸送は制限されていたので、本は近所隣りや通りがかりの人々にやってしまい、いくらかあった自分の原稿

なので、私はただ驚いた。彼は例によって逃避の理由を語るうとはしなかったが、ほぼ想像がついたので、私も例によって敢て問わないことにした。出発に際して、彼は使い残しの木炭をくれるというので、私はリュックを用意して高円寺の彼の家を訪れた。その頃私は荻窪に住んでいたから、彼の家まで一時間とはかからない距離にあった。木山夫人もすでに郷里へ引き上げる準備を完了していて、家中はがらんとしていた。灯火管制下の暗い電灯の下で、私たちは乏しい配給の酒をくみ交わして別れの宴をはった。生きて再び会う日がくるかどうか、そんな思いが互いの胸の中によどんでいたで、話も余りはずまなかった。そのとき彼は、

「これを預っておいてくれ」

といて、一冊の詩集の原稿を私に託した。私は少女雑誌の編集を辞して、ある出版社の編集を担当していたので、機会があったら出版してくれという意味だったと思うが、用紙も配給制度になっていたので、彼の詩集を出版することは困難な時代であった。しかし、これより一年ほど前に、彼は私の社のために一冊の本を書いてくれた。それは「少年日本歴史文学」というシリーズ物で、木山が書いたのはその中の「和氣清麻呂」であった。執筆者は「日本浪漫派」同人を中心にした二十人位の作家であるが、ほんとうに原稿を書いてくれたのは木山の外には、中谷孝雄、伊藤整喜

や雑誌の切り抜きなども、庭に火をたいて燃した。再び机に向かつて書を読んだり、ものを書いたりする平安な日はこないものと、私は全く絶望していたのである。だが木山から預かった一冊の原稿だけは、数冊の辞書や万葉集などといっしょに布団包みの中へつつこんで郷里へ運んだ。

私の郷里奈良県十津川村は、駅から百キロも離れた紀州との国境の山村である。妻子をつれてたどり着いた故郷の村は食料もいっそう乏しく、村に若者の姿は見られなかった。それでも老人達は、「なあに、野山に青い物がある間は、人間は死ぬもんじゃない」と言って、祖国の勝利を信じ、松根掘りや木材の伐採に汗を流していた。私にも召集令がきて大阪第二十三部隊に入隊の命令を受けたが、出発を前にして終戦の詔勅が下った。

払い下げの物資を背負った復員兵が、重い足どりで峠の道を下って来はじめた。私は保田与重郎氏と木山君の安否が気づかわれてならなかったで、留守宅へ手紙を出してみた。岡山県小田郡新山村という木山の郷里が、すらすらと口をついて出てくるほど、彼と私のつながりは深かったのである。

保田氏については令弟順二郎氏から、木山君についてはみさお夫人から、それぞれ返事があった。どちらも「まだ帰らないが、まもなく無事に帰ってくるものと信じている。帰ったらすぐ知らせるから——」という意味のことが書い



であった。

私が帰還した保田氏を桜井町へ訪ねて行ったり、木山君から「帰ってきた」という手紙を受け取ったりしたのは、二十一年だったか二十二年だったが、これもはっきりとは覚えていない。

私は二十一年に東京のある雑誌社から、家を用意するから上京しないかという誘いを受けたが、毎日山で木を樵りながら、ここを自分の死に場所ときめていた。ところが二十三年の暮に別な出版社から「家を提携するから上京せよ」という親切な招請があったので、もう一度東京へ出稼ぎに行く気になった。それというのも弟が復員したので、それまで私だけを頼りにしていた母が、私の離村を認めてくれたからである。木山にこのことを知らせると、彼は自分も上京したいから、君が東京へ行ったらすぐ知らせてくれと言ってきた。

私が上京して現在の所に居を定めたのは、二十四年三月末のことである。私はすぐ木山に知らせてやった。それから二週間もたった頃、岡山から一個の布団包みが届き、それよりまた二週間ほどおくれて木山がやってきた。私達は手を固く握って、無事に再会できたことを喜び合った。彼が二重回しを着て出かけたりしたのは、この頃のことである。私は木山に、預かっていた詩集の原稿を返すと言ったが、彼は「今はいらぬから持ってきてくれ」と言うので、

そばに折畳みの将棋盤がおいてあったので、私は彼の無聊を慰めたいばかりに、三十年も手にしたことのない駒をつかんで勝負をいどんだ。彼莞爾として受けたが五分とたないうちに私は完敗した。彼は私の弱いのに、いささか拍子ぬけした様子だった。

木山捷平の文名が高くなり始めたのは、この交通事故以後のことのように思われるが、私は殆どその作品を読んでいなかった。もうかれこれ五年も前になるだろうか、私は一夜旅先の友人の家で眠れないまま、その友人が枕元へ置いていってくれた文芸雑誌のページをめくった。それには「茶の木」と題する木山の小説が載っていた。私は久方ぶりに木山の作品を読んで、思わず「うまい」とつぶやいた。私が二十数年前に指摘した木山の持ち味が遺憾なく結実したと思ひ、自分の目に狂いはなかったと少々うぬぼれた。私は木山に祝福の葉書を書きたいと思ったが、万年筆や葉書をいれた鞆を友人の書齋に置き忘れてきたことに気がついて、ついに果たせなかった。

ある日、めずらしく北村謙次郎氏から電話があつて、「君は木山の出版記念会に出席するか」と問われた。私は不覚にも木山が何を出版したのかも知らなかったし、もちろん出版記念会のことも聞いていなかった。「えっ、君の所へ通知もこないんだって？」北村氏は意外だという口ぶりだった。木山の本は今日までに既に何冊か出版されているよ

また戸棚の奥へしまひ込むことになった。

やが木山は、西荻窪へんに部屋を見つけて移って行った。それから彼の終の栖となった練馬区立野町に土地を見つけて、何度も手帳をもって見にきたり、住宅金融公庫への申し込み、私は保証人の判をついたりした。

郷里から家族を呼んで、木山の東京での新しい生活が始まった。私は肉を買って彼の新居を訪問した。木山は「こんな上等の肉は初めてだ」などと言って、ひどく喜んでくれたが、再出発はしたものの、彼の苦闘の日は長くつづいた。脳下垂体埋没療法をやったが、そのあとがいけなくて病院通いをしたり、右手の指の神経をどうかしたとかで（断っておくが、彼が手のことでS教授に噛みついたのは、これより十年も後のことで、この話には関係ない）字が書けなくなつて、「左手で書いたので読みづらいだらうがお許しを乞う」といったような断り書きのゴム判を捺した葉書をもたらしたこともある。それには「文名はさっぱり上がらないし駄目だよ……云々」と、左手で甚だ悲観的な文字が書いてあったりした。

おまけに交通事故という災難にまであつて、彼はこれでもかこれでもかというほどに痛めつけられた。私は、吉祥寺の病院に入院中の彼を見舞った。彼は撫然とした面持ちでギブスを当てた足を投げ出して、ベットに坐っていた。

うだが、私はついに一冊も寄贈にあやかることがなかった。しかし私は、これも是非ないことと思つている。本が出版されたからといって、旧友にいちいち送るのは大変なことである。私にもその経験があるからだ。そうは思つても、近くに住んでいる神山潤氏を訪れて、氏の机上に木山の新刊書がのせてあるのを見つたりすると、私はちょっと心にひつかかるものを感じないわけにはいかなかった。

戦後、私は子供の本ばかり書いているので、彼に贈るべき著書もなかったが、それでも読んで貰いたいと思つた詩集など、一冊ばかりの本を進呈している。だが彼は、昨年あたり出版された彼の詩集さえ私に送ってはくれなかった。私は彼の「旧友名簿」の中には入つていても、いつの間にか「只今交友名簿」の中からは除外されていたようだ。だが、このことで彼を責めるわけにはいかない。疎遠はお互い様のことだった。彼に多くの知名の友人ができたように、私も市井に多くの知己を得てその方面の応接に忙しく、彼と旧交を暖める折が、しだいに遠のいていたからである。

藤井重夫氏の直木賞受賞祝賀パーティで木山に会つたのも、実に三、四年ぶりの対面であつた。その時、彼はひどく懐しげな表情をして私をつかまえ、大いに飲み且つ談じていたが、果てはちらほら見える女性を目で追ひながら、大声で性談をぶち始めた。人差し指と中指の間に親指をはさんだ握りこぶしを突きつけて、「女も汁が出んようにな



「たらあかんよ」といった調の原住民的性談である。それは若い頃、私達がしばしば閉口して頭をかかえたことのある彼独特の生臭い捷平法話といふべきものであった。私は人に聞かえないかとはらはらしながら、彼とひんぱんに往來した青年時代が甦ったような錯覚に捉われて、げらげら笑ったものである。

翌日になってから、「昨夜は久しぶりに会えて愉快だった。われわれは時たま会って話したほうが良さそうだな」という意味の葉書を出したが、彼からは何の返事もなかった。彼はまた私とは別の世界へ遁走してしまつたのである。

私の古い友人——木山捷平は死んだ。四十年にわたるつきあい、彼が文名を馳せたこの十年間を、親しく往來すること少なかったのは私としても残念であるが、それにも倍して三十年間の「貧時の交わり」は、深く、温く私の胸に残ることだろう。私の二人の娘は既に成人して、今は「木山さんごっこ」の遊びをすることもなくなつたが、新聞で彼の死を知つた時、「あっ」と絶句して目をふせた。彼の隨筆の愛読者だつた老妻は深く彼の死を悲しみ、木山家の庭の木を見に行きたいと今も言っている。私もせっかく円熟の境に入つた彼の文学のため、彼の家族のため、彼自身のために、もっともつと長生きしてほしいかと思つた。

彼は亡くなる一か月前の、ある朝早く、病院から私に電話をかけてきた。とても元氣そうな声なので私はやや安心

私は考える。

木山捷平は見かけによらぬシンの強い人であり、一見柔和そうで内に秘めた闘志も旺盛であつた。そして彼のポーカー・フェースは、手のこんだ演技であり計算であることも、私は昔からよく知つていた。だが、どうしてあんなにまで執念深くS教授に噛みついていったのか、それだけは今でもわからない。もし、そこにも彼の演技や計算がまじつていたとすれば私はちょっとかなしい気がするのである。

アンケート

古 谷 綱 武

一、「メクラとチンバ」

二、その後の多くの労作に対して、この詩集をあげるのはどうかとも思いますが、改めて読み返してやりここに木山君のその後の活動のすべてが、ひそみこんでいると思ひました。昔この詩集をはじめてよんだとき、僕は自分の全く知らなかつた世界にふれて深い感銘を受けました。

した。彼は言った。

「木山だよ、あの詩集の原稿を返してくれないか」  
私はハタと困つた。そして暗然とした気持ちにおそれ、二十数年間も預けつ放しにしておいた原稿のことを、病床でふと思ひ出して、急に電話をかけてきた彼の心情が、私なりに推測できたからである。

そして私が困つたのは、彼の原稿は数年前に、私の昔の詩集といつしよに、某氏によつて私の家から持ち出され、そのまま返つてこないからである。もしもその原稿が、某氏から更に誰かの手に渡つていて、万一この小文がその人の目にふれた場合は、どうか彼の原稿を木山家へ返してくれるよう、お願いしておく。なぜなら、それは不当な手段で私の家から持ち去られたもので、木山捷平の未発表詩集であるからだ。

わが友、木山捷平についての思い出は尽きない。だが私は、故人となつた友人について多く語ることを好まない。これを文章にする場合は、どうしても「面白い話にしたい」という意識がはたらき、しぜん故人のプライバシーに關することに筆が走りがちになるからである。言論は自由であるが、死者のプライバシーまで侵害する権利は誰にもないはずである。人は「生まれた、生きた、死んだ」それよりのだ。第三者が公然と論議することを許されるのは、「彼が如何に生き、何を成したか」という問題だけである、と

伝統！ 堅実！ 新技術！  
明日の建設 松村組



株式会社 松 村 組

本 社 大阪市北区空心町1丁目70番地  
電話大阪(06)352-1131(代表)  
支 店 東京・札幌・名古屋・広島・福岡